8 おわりに

1. 教員から

■ 谷口 純一　特任教授

2020年４月から私が「地域医療・総合診療実践学寄附講座」の特任教授を拝命し、大学に設置された「地域医療支援センター」の副センター長と併せ、2021年度も引き続き、同センター業務と、それ以外の従来取り組んできた内外の業務とを、バランスを取りながら、整合性をつけつつ、業務遂行を行なおうとしました。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響も大きく、地域医療機関との情報共有等も、今年度も、ほとんど出来ず、業務の方向性もコミュニケーションの困難さに直面いたしました。

具体的には、寄附講座、地域医療支援センターにおける、私個人の活動として、以下を目標として取り組みましたが、簡単に振り返ってみました。

１）県内地域医療機関関係者への訪問、面談と分析・対応検討
　→極一部の関係者との接触に止まった。
２）総合診療専門医の養成に関しての企画・立案
　→試験受験の為の専攻医のサポート等に、極一部関わったのみ。
３）地域医療関連の卒前教育の実施
　→予定された、授業、実習はおおよそ実施できた（新型コロナウイルス感染症の為、一部限定的となったが）。
４）修学資金貸与制度の制度運営の実施と整備
　→ほぼ、制度利用者への面談を一部行ったのみ。
５）地域医療機関への診療・教育支援
　→依頼の有った少数の機関で、現場での診療・教育支援は行った。
６）その他、機構関連諸業務（運営会議、連絡調整会議、理事会、等）
　→会議等に参加したが、ほとんど実質的な関わりは出来なかった。

また、寄附講座、地域医療支援センター業務以外の、個人的な大学内外業務は、以下を取り組みましたが、こちらも、簡単に振り返ってみます。

１）大学病院総合診療科外来診療、及び、救急外来診療
　→設定された診療業務は滞り無く実施できた。
２）医学部医学科の卒前教育で、地域医療以外の授業・実習
　→依頼された授業・実習は、ほぼ滞り無く実施できた。
３）大学卒前医学教育の横断的な業務補佐
　→臨床医学教育研究センターを中心としてある程度支援できた。
４）卒後初期研修・専門医研修（総合診療）の指導・プログラム管理補佐
　→一部の現場指導のみは実施できた。
５）学内外の様々な依頼業務（共用試験実施評価機構各種委員、全国医学部病院長会議カリキュラム委員、臨床研修指導医養成ワークショップ、看護特定行為研修関連、心肺蘇生法講習会、等）
　→依頼業務が増え、こちらの業務のエフォートが増えたが、可能な限り協力した。
６）学会等の各種委員会活動（熊本総合診療研究会の運営、内科学会内科専門医部会、日本専門医機構総合診療専門医関連部会、等）
　→こちらも、新たな委員会活動の依頼が増えたが、可能な限り協力した。

以上、振り返ってみましたが、「地域医療・総合診療実践」と言う名称の責任者として、その実践の困難さに直面させられ、一部の医療機関等には、大変ご迷惑・ご心配をおかけした事も多々あったかと、大変遺憾に思うと共に、お詫び申し上げます。今までの経験を踏まえ、今年度一杯で、立場を変え、地域医療の現場で、地域医療・総合診療の地道な実践を試みたい思っております。今までのご支援・ご理解に対し、この場をお借りして、改めて感謝申し上げますし、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

■ 佐土原 道人　特任助教

早いもので地域医療・総合診療実践学寄附講座に赴任してまる５年が経ちました。昨年度の最大のトピックスは、2018年に日本専門医機構の基本領域の専門領域として開始された熊本大学総合診療専門研修プログラムの4名の選考医が専門医に合格したことです。制度の先駆者として、今後のますますの活躍が期待されます。また、昨年度は3月より総合診療科がスタートし、大学病院の診療部門に加わることができたのも進歩です。社会人大学院生2名も研究をスタートしております。私は、医局長を拝命し、これまでの県の委託事業とそのミッションを具現化する寄附講座の仕事に、診療科の運営業務が加わりました。診療支援先は、昨年に引き続き公立多良木病院にお世話になりました。

やはり、コロナ禍で出張は激減、臨床研修指導医講習会や看護師特定行為指導者養成講習会、看護大学院の実習授業もオンラインやその併用と感染対策を厳重な上の実施と、不便が続いています。昨年度も学会発表は低調でしたが、共同研究を行なった英語論文が２篇アクセプトされました。研究を通じてネットワークが作れるようになった気がします。昨年度は、科研費の最終年度でしたが、一部の残った成果をきちんとアウトプットし、次の競争資金獲得に向け頑張りたいと思っております。
今後ともよろしくお願いいたします。

■ 後藤 理英子　特任助教

日頃より熊本県女性医師キャリア支援センターへのご理解とご支援を賜り、誠に感謝申し上げます。令和3年度も引き続きコロナに振り回された年でしたが、昨年に比べてWeb開催などにも慣れ、少しずつ活動を進めることができました。

今年度CLOVER第4版を完成することができ、感無量です。県内病院に勤務する女性医師数は第1版当時に比べて飛躍的に増加しており、短時間勤務や当直免除、院内保育や病児保育の設置にご協力くださった各病院様、先生方に改めて深く感謝いたします。

課題点としては、熊本県では専門医取得率について未だ男女差があることが挙げられます。今後はこの解消に取り組み、高齢化社会を迎え、質・量ともに高まる医療の社会的ニーズに、医師の働き方改革を適えつつ答えなければならないのではないかと考えております。

長年指導してくださった谷口純一先生、活動を支えてくださった横手友紀子さんのご退職…寂しい気持ちでいっぱいです。私自身どこまでこの役目を務められるのか甚だ自信を失っているところでございます。

日本の医師の男女共同参画はまだまだ発展途上です。この活動が引き継がれていくことを心から願っています。また、今後も皆様のご指導・ご鞭撻、お力添えをお願いできれば幸いです。

■ 髙柳 宏史　特任助教

コロナ禍が続いています。まだまだ収まることはないと予想しています。残念ながら過大な期待をかけていたと振り返ったのはCOVID-19の内服薬モヌルビラビルです。

実際、処方対象を確認してみると重症化リスクがある人に限られ、さほど広く一般的に用いることはできない。現在（2022.2月時点）、流行している年齢層がワクチン接種率の低い若年層が中心であり、それらの流行を抑え、かつその世代で重症化をおさえるような使用方法を内服薬は担えませんでした。なので、まだまだ感染者数のコントロールという点については、防疫や人や物の流れの制限や個々人の感染防御に頼るしかありません。いかに重症化率が既存の株よりも低いといっても感染者数が多ければ、結局は医療や社会機能に影響してしまうので、医療崩壊につながってしまいます。そう考えると、今後中長期的に医療現場や社会的損失に見合う額を補償にあてて1週間だけでもしっかりと社会機能の停止（ロックダウン）に回したほうが、意外と早期に感染も落ち着くのではないかとも思ってしまいます。終わりの見えないコロナ禍をいかに乗り切るのか。不安を感じますが、できることを一つ一つやるしかありません。

研究のテーマとして2021年度からは3つ目のテーマを持つようになりました。「受診理由の臨床における意義」、「災害とプライマリ・ケア」、そして、3つ目として「Positive deviance」です。研究として興味はあるのですが、Academic writing 、とくにそのための時間をどのように設けるかが目下の課題です。

■ 北村 泰斗　特任助教

本当にあっという間の一年間でした。

これまでの初期・後期研修での生活とは、まるでテイストの異なる生活で、右も左もわからず、なにかしら役に立っている実感もなく、目の前のことをこなすことでいっぱいいっぱいで、毎日自問する日々でしたが、1年を経て、皆様の絶え間ない温かいご指導を頂いた結果、ようやく自分に求められているものをおぼろに理解できるようになって参りました。

研修医の立場、管理者の立場の両面に現時点で触れられたことは、自分にとっては大変意義のある1年でありました。このような機会を頂けたことに厚く感謝申し上げます。少しずつでしたが現在の役割にも馴染みをえるようになって参りましたので、ここらでstep upを図っていきたいと思う所存です。

■ 松本 明樹　特任助教（天草教育拠点指導医／天草地域医療センター　総合診療科）

天草で総合診療医として働いた２年間は、大きな学びとなりました。

着実に他科、多職種からの信頼を得ることができ、地域からの大きなニーズを感じる日々でした。「総合診療科が出来てから、どこに相談すればいいかわからなかった患者さんたちを相談できて助かります」と何度言われたか分かりません。

今までは比較的規模の大きい病院で勤務してきた私でしたが、中小規模の病院でも総合診療科として地域に貢献できる可能性を感じました。

研修医にとっても総合診療科は人気のローテーション科の一つであり、絶えず１-２人の初期研修医や学生がローテーションしてくれました。当科としても教育に対して、「毎日の３つの学び」、「中期・長期マイルストーンの設定」、「振り返りのための個人面談」など初期研修医教育に新しい取り組みを行い、それらが好評だったようです。

臨床・教育・マネジメントの３つの柱で組織作りの手応えを得ることが出来た２年間でした。今後は研究の柱も加わることで、組織として更に飛躍できると確信しています。

天草・玉名・大学と拠点の連携による相乗効果はとても大きくなるでしょう。

今後教育拠点が河浦病院へ移りますが、引き続き天草での総合診療医の育成が進むことを願います。

■ 中村 孝典　特任助教（天草教育拠点指導医／天草地域医療センター　総合診療科）

2021年度は熊本大学病院地域医療・総合診療実践学寄附講座の特任助教として天草地域医療センターにある教育拠点に赴任しました。そこでは総合診療科所属の医師としての臨床だけでなく教育拠点の助教としての卒前、卒後教育を行いました。

前年度とは勤務先や立場が変わりやや不安もありました。また個人的なこととしては、家族４人で熊本市から天草市に引っ越すことになりましたが、1月に生まれた子供の熊本市内の病院受診や入院もあり、家族への負担も大きかったと思います。

ただ大学病院、医療センターのスッタフ、そして同僚の協力もあり比較的ストレスなく１年間を過ごすことができました。

また教育拠点の職員として診療と並行して、医学生や初期研修医への教育業務を行わなければなりませんでした。私が所属していた総合診療科は常勤医が２名しかなく、通常外来、救急対応、病棟管理を行っていく中ではなかなか教育業務に時間を割くことが難しい時もありました。しかしながら医学生、初期研修医の方々のモチベーションが高く、逆にこちら側が尻を叩かれているような状況となり私自身の勉強にもなりました。

この１年間は前年度と同様に、周りに支えられていることを強く実感できた年となりました。そしてこの経験をいつかどこかで周りに還元していくことが
私の課題だと思います。

■ 鶴田 真三　特任助教（河浦教育拠点指導医／天草市立河浦病院　総合診療科）

2021年４月に河浦拠点が立ち上がり、そこに赴任して新たな一年がスタートしました。診療圏は主に旧河浦町・天草町の地域です。過疎で高齢化率は高く、広い土地に集落が点在しており、かといって医療機関は少なく、まだまだこの地域だからこその医療を考えていく必要がある場所です。その中で、こ

の地域で培われてきたものがあり、地域ならではのシステムやアイデア、連携などもあり、アクティブさがあります。プライマリ・ケア、地域づくりを行っていく上で、とても楽しい場所です。

COVID-19感染の流行のため、なかなか地域活動が行いにくい日々が続きますが、リモート会議なども活用し、できる範囲では活動を開始しています。今後、地域の様々な職種の方や住民と協議しながら、よりよい地域づくりを行っていきたいです。

当初想定していたより人手不足で忙しいですが、楽しく過ごせました。後半はレジデントが赴任してくれたので、このフィールドだからこその指導ができるようになりました。今のレジデントにはゆっくりと一人前になってもらいたいです。そして、いずれは若手医師や学生から「1年でも河浦に行けば楽しく成長できる。」と言われるような教育拠点にしていきたいです。優秀なレジデントもそうでないレジデントも研修を希望してもらえるような施設になるよう、今後も普段の診療、教育を楽しく続けていこうと思います。

ちなみに、河浦病院に赴任してイカ釣りにはまりました。仕事や育児だけではなく、イカ釣りも精進したいです。

■ 久保崎 順子　特任助教（玉名教育拠点指導医／くまもと県北病院　総合診療科）

2021年度は、くまもと県北病院の総合診療科で勤務しました。地域の先生方からたくさん紹介もあり、幅広い疾患を診ることができました。最も印象的であったのは、ALS の患者様を当院で看取ったことです。ALS は在宅医療を導入することも多く、家庭医や総合診療医が診る機会も多くあります。私はこの一年で2名のALS 患者さんを担当しました。うちお一人は、気管切開をしない方針であり、NPPV を付けていましたが、それでも呼吸苦の訴えが持続するため、モルヒネを使用していました。意思表示が難しいため、できる限り時間をとって、可能な手段でコミュニケーションを図ることに努めました。モルヒネの増量も探り探りであり、最後の方は「早く逝きたい」と訴えていました。亡くなった後に、家族からは、感謝しかされませんでしたが，わたしとしては「もっと早く楽にさせてあげられなかったのか」という反省が残りました。状態がまだ軽い時に、訪問診療していた方でもありましたので、先日、患者さんのご自宅にお線香を上げに伺いました。奥様から、元気だった頃のお話や、葬儀の時のお話などを聞くことができて、いい時間になりました。

医師になってから6年が経過していますが、マニュアル通りじゃないことばかりで、後悔や反省がつきものです。どうしても患者を「さばく」感覚になってしまいがちですが、回ってくる学生さんや研修医の方々の、患者さんに対するみずみずしい優しさに触れると、初心に帰る気持ちになります。患者さんたちは医療者の優しい言葉にどれだけ救われるか、逆に、心ない一言にどれだけ傷つくか、おそらく患者の立場にならなければ分からないと思います。医師である前に人間であるということを、これからも忘れずに行きたいと思います。

さて、2022年4月からは、国立医療センターの総合診療科に異動します。今後も後輩がたくさん増えるように、新しい場所でもお役に立てる存在でありたいと思います。

■ 田宮 貞宏　非常勤講師（くまもと県北病院　院長／総合診療科）

令和３年度の私のトピックといえば新病院開院と終わりの見えないコロナ禍ということになると思います。

令和３年3月の病院の合併、移転に伴い、玉名教育拠点もくまもと県北教育拠点と名称が変わり、新しい病院でスタッフは日々、奮闘していただいています。

誰も経験のない病院の引っ越しでは小山先生が陣頭指揮をとり、大きな問題は発生せず完遂し、新病院の開業に多大な貢献をしていただきました。

日々、状況が変化し続けている新型コロナウイルス感染症の流行に関しては、郡市医師会との協力体制が状況に合わせてアップデートされ柔軟な対応がなされていると感じています。総合診療科の皆さんが日頃から地域連携室をはじめとした院内スタッフ、医師会の皆様で良好で実践的な関係性を保ち、活動しているおかげだと思っています。

私としましては2021年10月、思いがけなく院長を拝命することとなりましたが、変わりなく若い医療人の学びの場として病院が機能するように働きかけ、玉名を善き医療人が育つ地域にしたいと思っております。また、地域の枠を超え、行政、医療機関、福祉施設に総合診療科の価値に関する情報を発信し

ていきたいと思っております。今後ともよろしくお願いします。

■ 小山 耕太　非常勤講師（くまもと県北病院　総合診療科部長／総合診療科）

「次のステップ」

熊本大学に帰還して9年目、教育拠点に赴任して8年目に突入しました。熊本地震を経験したり、コロナ禍に突入したりと、想定を大きく外れた事態に陥りながらも耐え、発展する速度は落としつつも確実に前進していると思うこの頃です。くまもと県北病院も、教育病院としての医学生・研修医からの支持を目に見える形で受けられるようになってきました。中でも、田宮先生の院長就任は、教育拠点を支える全ての方々の喜ぶところとなりました。

この喜びをバネに、次のステップとして、教育拠点で研鑽を積んだ人材が、研究分野にもコミットし、業績を上げるべきフェーズに入ったと思うこの頃です。当然ながら、現在大学院生として研鑽を積む、北村先生や武末先生への期待は大変大きいものですし、松井先生を中心に、大学院生を指導する我々教員・指導医の責任も同じ様に大きいものと、身が引き締まる思いです。そんな中、私個人としても（かなり遠回りしましたが）更に研究指導の為の研鑽を積むべきフェーズに突入したと考えております。

今年度は、組織としての飛躍の為に、個人としての次のステップを意識した活動を行っていきたいと思いますので、引き続き、皆様のご指導とご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ゆっくりだけど、確実に前進

■ 古賀 義規　客員研究員（御所浦診療所　所長）

御所浦診療所は熊本県内で離島医療を経験できる数少ない診療所の１つで、総合診療科医師2名による常勤体制となっています。

今年度もCOVID-19感染症流行のため、移動を伴う医学生実習や、多くのイベントが影響を受けました。何とか1人の感染者も出さずに踏みとどまっていたのですが、ついに今年1月には御所浦にも比較的大きな流行の波が押し寄せました。保健所や島外の入院施設の支援もあり、最終的には島民1人ひとりの行動変容で何とかこの波を乗り切ることができました。

一方で、コロナ禍で、オンライン会議などリモートでできることが一気に増えたことは不幸中の幸いだったと思いますが、同時に対面の重要性もまた浮き彫りになりました。地域の連携は重要なテーマだったのですが、コロナ禍で停滞してしまったことは否めません。来年度は対面とオンラインの両面戦術でコロナ以前よりも力強く地域連携を図れるようになるものと考えています。

ところで令和4年1月からは新たな医科と歯科の複合診療所での診療が開始となっています。研修医や医学生のための宿泊施設も併設されております。蔓延防止重点措置の期間中でありましたが、地域住民の皆様のご理解もあり、3月には最初の医学生を受け入れることができました。

今後はより多くの医学生や研修医に離島・へき地での地域医療に理解を深めてもらい、地域医療・家庭医療にやりがいをもって取り組める人材育成の一助となりたいと思います。

■ 片岡 恵一郎　客員研究員（小国公立病院　病院事業管理者）

2018年度より、松井先生と谷口先生のご厚意により客員研究員として、小国公立病院に勤務しながら、地域医療支援センターに出入りさせていただいており、2021年度が４年目となりました。

今年度より、小国公立病院の事業管理者となり、これまで以上に病院の管理・運営業務が増え、地域の病院の未来を担うという事の責任の重さを実感しているところです。

新型コロナウイルスの感染波が何度も押し寄せ、熊大の地域医療支援センターに足を運ぶ回数が例年よりも少なくなってしまいましたが、今年度の私の報告のメインは何と言いましても、熊本県地域医療支援機構広報誌「COCODE! vol.2」にて、小国を特集して頂いたことです。事務局の方、業者さん、ライターさん、カメラマンさん等々の多くの方々に小国まで何度も来て頂き、念入りに取材をしていただいたおかげで、これ以上はないというぐらいの素晴らしい内容の特集を作り上げていただきました。

この冊子、小国の住民のみなさんの評判も大変好評で、今後数年はこの冊子を使ってあちこちで病院紹介ができそうです。また、この「COCODE!」をみて、ひとりでも多くの若い医師に、総合診療・地域医療に興味を持っていただけることを期待しております。個人的にはカメラマンさんの腕が良すぎて、写

真と現物のギャップをいろんな人に何度も指摘されるのが痛いです。さすがプロ。

熊本大学からの地域医療支援は、地方にとって本当に貴重なもので、今年度も高柳先生、松田先生、研修医の先生、優秀な学生さん等々多大なるマンパワーを小国の医療現場に送っていただきました。2022年度も、引き続いての厚いご支援に対してご恩返しができる様、客員研究員としてできる事を微力ながら務めさせていただきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

■ 武末 真希子　医師（総合診療科医局員）

本年度は診療所で勤務させて頂き、家庭医として、より地域に密接した診療や、プライマリケアのセッティングでの診療経験を積むことができました。医学的な知識だけではなく、連携の技術や長期的に信頼関係を築くためのコミュニケーション能力など、多角的な能力を養うことができました。自身の未熟さを痛感する日々ですが、地域に貢献できる医師になれるよう精進しています。

また、社会人大学院という形で研究にも携わり、日々苦戦しています。思うように進まない毎日ですが、研究について学んでいくことは論理的な思考能力の養成に役立ち、日々の診療でも困難に直面した際の物事の捉え方や対処の仕方にも役立つことだと実感しています。来年度は成果を出せるよう、更に研鑽を積んでいきます。

■ 松田 圭史　医師（総合診療科医局員）

今年度はついに家庭医療専門医試験を受験し、無事合格することができました。今回受験したことで、改めて家庭医療専門医・総合診療専門医に求められる能力を再確認することができ、まだまだ至らない点も多くあることを実感することができました。今後は今回の反省を活かして、より優れた家庭医療・総合診療医になるべく研鑽を積んでいきたいと思います。また、今年度は小国公立病院での勤務が３年目となる年でしたが、通常診療に加え、新型コロナウイルス感染症に関連する業務（発熱外来、ワクチン接種）や訪問診療の組織的なシステム構築、学生・研修医の教育・指導等を中心的にマネジメントする機会も多くありました。その中でより広い視点（病院全体、町全体等）を得ることができ、組織・チームをどう動かすか、といったことも学ぶことができました。教育については、今後は総合診療指導医の資格を取得し、後進を育てながら一緒に総合診療を盛り上げていければと思います。次年度からも診療、研究、教育、組織運営等、幅広い視点と興味を持ちながら、家庭医療・総合診療専門医として、日々精進していきたいと思います。

■ 空田 健一　医師（総合診療科医局員）

今年度も御所浦勤務となり、イカの釣り場まで徒歩2分という恵まれた環境を最大限活用する方針としました。まずは、道具を見直すこととし、山鹿釣具の竿と評判のよい糸を購入しました。釣り方は、ユーチューブで学びました。不在時や悪天候を除き、朝夕通いました。釣果は、とても素晴らしいものでした。その日に食べるイカを釣り、酒を飲む生活になりました。食べたイカが100を超えたころ、太刀魚の時期になりました。ヒラメやキジハタなどが釣れることもあり、2日に1回くらい釣った魚を食べていました。野菜は、合わない気がして、あまり食べませんでした。肉は高価なので、あまり買いませんでした。玉子は、島で買ったものを生で食べるといまいちだった気がして、その後は購買意欲がわきませんでした。バランスのよい食事は、なかなか困難でした。住民の皆さまを診療所で検査すると微量元素やビタミンの不足をびっくりするほど認めました。いったん薬剤で補充することが多く、再発防止に玉子や肉の摂取を強くおすすめしましたが、複雑な気持ちでした。島民の課題のひとつは栄養と思われ、うまく介入できないか考える中、小学校で校長先生、担任の先生、保健師らと相談できる機会がありました。小学校では、健康で健全な食生活に関する知識や技能を身に付けるため、朝食を食べること、おやつを食べすぎないこと等に取り組んでおられました。しかしながら、親の考え方によるため、改善は困難のようでした。私からは、一人暮らしの男性は自炊できないことが多く、子供のうちに技能を身につけて欲しいことを伝えておきました。

今年度は釣りをすることによって気持ちが安定する等の効果があり、よい診療ができるようになってきました。今後も皆さまに信頼される医師を目指し努力していきます。引き続きご指導いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

■ 平賀　円　医師（総合診療科医局員）

球磨郡公立多良木病院での勤務は2年目でした。外来、病棟、週一回の診療所、研修日として近隣病院での二次救急など、様々なシチュエーションでバランスのとれた仕事ができたと考えます。多良木病院はかかりつけ医の要素が大きいため患者数が多く、診察と同時に外来のタイムマネジメント感覚も身につけることができました。ポートフォリオのテーマでもあった『患者中心のケア』という概念を学んだおかげで、普段の何気ない診療もより一層深く介入できたような気がします。

昨年度末で専攻医プログラムが終了し、今年度は専門医試験を受験しました。試験前の提出書類などは揃えるのに苦労はありましたが、なんとか受験までたどりつき、無事受験者4名皆合格することができました。長い道のりでしたがひとまずほっとしています。今回の経験を来年度の専攻医に伝えられたらいいと思います。

また、その他にもいくつかチャレンジできたこともありました。ひとつは、The New England Journal of Medicineの画像症例に投稿したことです。1年前に内科九州地方会で発表した内容でしたが、時間はかかったものの一応は投稿までできました。即座にrejectを味わいましたが、良い経験になりました。ご指導いただいた佐土原先生、ありがとうございました。

１月には熊本県医師の講演会で講演する機会をいただきました。専門医取得に関して話をさせていただきましたが、今後は自分一人のキャリアだけでなく、熊本全体の総合診療地域医療を視野に入れて医療を進めていかなければいけないと実感しました。まずは学生・研修医らに総合診療の魅力を知ってもらうのが先決なので、そういった活動も力を入れたいです。

地域枠制度の人間として地域/僻地での勤務を行いながら専門医取得までできました。義務年限も後半戦となり、後期研修なども考えていかなければなりません。令和4年度は阿蘇医療センターでの勤務となり、心機一転頑張っていこうと思います。「診療＋α」を目標にいろいろなことにチャレンジしたいと考えています。

2. 事務から

松岡 大智
地域医療支援
コーディネーター

地域医療支援機構では、昨年度から広報誌「COCODE ！」を発行し、3号まで無事出来上がりました。20ページくらいの小冊子ですが、地域医療に正面から取り組んでおられるドクターや地域医療を目指す医学生そして病院を利用する地域の方々に焦点を当て、きれいな色合いの写真と読みやすい文章で地域医療の魅力を人々に伝えています。

この一冊を作るために、多くの時間と労力がかかっています。事前の取材で地域を知り、人を知り、スタッフがそれぞれの専門の知恵と技術を結集し、最高のものを目指して制作しています。ページに輝く笑顔の裏には制作に携わる人々の汗と熱意が詰まっているのです。

地域医療も、医師はじめ医療スタッフや介護スタッフはチームとして様々な患者さんの治療や健康保持に取組んでいます。スタッフは、患者さんの病気の他に家族や生活環境のことも知って、チームで議論しながらその人に相応しい治療法を探します。COCODE ！を読んで、患者さんの笑顔がたくさんの人々によって支えられていることを改めて気づかされました。皆さんも是非COCODE ！を読んで、地域医療の今を感じてみてはいかがですか。

若杉 秀作
地域医療支援
コーディネーター

令和2年度以上に令和3年度は、コロナ感染症一色の年であり、まん延防止等重点措置期間がなんと140日以上と、人の行動があらゆる面で制限されました。

私どもの事業を展開していく中ででも、その影響を大きく受けた1年間であったと思います。

そんな中、機会があり県内の知事指定病院34の病院を直接訪問することができ、公私にわたり、考えさせられることがありました。

前者では、人口減少さらには過疎化が進むにしろ、そこに住む人々の健康で安心して生活を営むためにも、病院というものはなくてはならないという思い。

後者では、人口減少さらには過疎化が進む中、病院だけが聖域かといえば、決してそうとも言いきれないのではとの思い。

病気を罹ったとき近くの病院を気軽に受診することができ、また自分の意に添わなかったら、他の病院を選択し受診することができる、熊本市の医療環境下にいる私。なんと恵まれていることやら！

熊本県では、医師が不足する地域の病院等に医師として勤務しようとする医学部生に対し修学資金を貸与し、県内の地域医療を担う医師を養成するということで、「熊本県医師修学資金貸与制度」が平成21年度に創設され今日にいたっており、私ども熊本県地域医療支援機構は、本貸与制度による、医学部生、医師に対しきめ細やか支援を継続して取り組んでいかなければならないと考えております。

高塚 貴子
女性医師復職支援
コーディネーター

令和3年度も新型コロナの影響を受ける1年でした。女性医師からの相談や医療機関からの問い合わせもコロナ前に比べると格段に減少し、医療機関の訪問もできませんでした。しかし、昨年度から開催している地域で働く女性医師のオンライン交流会では、地域毎にオンラインで開催し女性医師のお悩みや勤務状況を知ることができました。交流会の案内をする際、先生方は忙しいので参加してもらえるだろうか？とためらう部分もありましたが、ご案内の連絡をすると楽しみにされている先生方が多く開催して良かったなと思います。出産・子育てしながらキャリアアップの為に頑張っていらっしゃる先生方のお話を伺うと、とても感心させられます。私もあと一年、頑張っていらっしゃる女性医師の方々が不安なく勤務を続けていけるように専任医師の後藤先生、県庁医療政策課の女性医師支援担当と協力し合って活動していきたいと思います。

山並 美緒

地域医療・総合診療とは何かも分からず入職して、とにかく必死に頑張った6年間でした。

熊本県の地域医療を支える先生方、総合診療医を目指す先生方、県医師就学資金を貸与されている学生の皆様のサポートをすることで、私も微力ながら熊本県民の皆さんの医療を支える一端になれていると感じ、とても誇りに思って従事してまいりました。このような誇りある仕事をさせていただき大変感謝しております。

日本の医療の現実も垣間見ることができ、一患者としてどのように医療を受けるべきか、受けないでいいように生活すべきか考えさせられ、生活習慣も改善しました。職場環境にも恵まれ、家庭と両立する事もできました。

与えられるばかりで何も恩返しできておりませんが、今後も何かしらの形で熊本の総合診療を支えるお手伝いができればと思っております。

日本では医療機関へのアクセスがしやすい反面、どの診療科を受診すればよいか判断がつけづらくなっていると言います。私自身、いくつかの診療科を受診してやっと診断がついた経験があります。今後、そんな日本の医療のカギとなるのが「総合診療医」だと思います。

新専門医制度も始まったばかりの今は過渡期で大変かもしれませんが、少しでも総合診療の必要性と、病ではなく「人」を診る診療の醍醐味に気づき理解してくれる学生さん・研修医の先生が現れ、熊本県の総合診療が発展することを祈念いたします。

6年間どうもありがとうございました。

山口　香

今年度は昨年に引き続き、Zoom（オンライン）が大活躍した１年でした。特別臨床実習（クリクラ）などの学外実習は、先生方の熱い思いと施設のご協力により、ほぼ対面実習が可能な１年となりましたが、地域医療ゼミはなかなか対面で集まることが難しく、総合診療セミナーも全ての回がオンライン開催となりました。ただ、オンライン開催ならではの利点は今年度も発揮され、遠方の講師をお招きしたり、全国からセミナー参加のお申し込みを頂いたりと、対面では実現しえなかった喜びも多くありました。

今後、Withコロナの時代になっても、Zoomとは縁がきれることはなさそうです。昨年よりは慣れ親しんだ感はありますが、まだまだ私にとっては奥深く、すぐに新たな機能が追加されたりで、油断が出来ません。Zoomに限ったことではありませんが、私自身の古く凝り固まった頭をフル回転させながら、来年度も少しでもスタッフの一員としてお役に立てるよう日々勉強していきたいと思います。

尾方 千穂

本機構業務に携わり、地方創生と医療の繋がりを考える事が多くなりました。

ここ熊本県の政策で「熊本県まち・ひと・しごと創生総合戦略」を定められています。

コロナ禍の昨今、一層「しごと」という事が難しくなってきているように感じます。働く事に関しての経験、学ぶ事も制限されてきているのを目の当たりにし、もどかしさも伝わってきます。

また、高齢化が進む中、医療のあり方も注目されるところです。特に地域医療の大切さは、身をもって感じる事が多々あります。

どこに居ても、質の高い、適切な医療提供が浸透して欲しいと強く願います。

そんな中、1人でも多く、雇用と医療がうまく繋がるよう、機構を通して様々な発信が出来るよう努めて行きたいと思います。

横手 友紀子

「地域医療とは？」「熊本県地域医療支援機構、地域医療支援センターの役割って？」といった具合に、右も左もわからないような状態でしたが、縁あってここに足を踏み入れた約6年前。

目にするもの、耳にするワード、携わる業務等、そのすべてが初めてのことばかり。不慣れなことも多く戸惑うこともありましたが、1日でもはやくセンター、機構の役割を理解し、運営や先生方のお役に立てるようになりたいと、とにかく必死だった1年目が懐かしく思います。

2年目の春。私の前任者の方が去り、うまくやっていけるか不安でしたが、修学資金受給者の皆さまのサポートや夏季実習、機構講演会・各種セミナーの運営、刊行物の作成、ホームページの運営、先生方のサポート、日常業務等、様々な経験をさせていただくなかで、経験を重ねることで次第に機構、センターの役割も理解してきましたし、気が付けばここで過ごした年数と経験値が自信へと変化し、自分自身の成長にもつながっていました。

それも、これも、ひとえにスタッフの皆さまの優しさと、支え、常に笑いの絶えない職場環境があったおかげだと感じています。ありがとうございます。

最後になりますが、熊本県地域医療支援機構、地域医療支援センター、地域医療・総合診療実践学寄附講座のスタッフの皆さまをはじめ、熊本県医療政策課、学内外の関連部署や地域の関連機関、学生の皆さま等、この6年間で出会い、関わってくださった皆さまに心より感謝を申し上げます。大変お世話になりました。そして、本当にありがとうございました。

皆さまのこれからのご活躍と、地域医療の益々の発展をお祈り申し上げます。

3. あとがき

2021年度は、2020年度に引き続き、COVID-19（新型コロナウイルス）のパンデミックで、世界中で大きな災難が持続しました。世界的に医療の現場もその対策に追われ、熊本県の地域医療機関にとっても、苦悩に満ちた年が続きました。

その様な中で、私ども「地域医療支援センター」の2021年度の活動をご報告させて頂きました。設置から８年目となり、今年度は、私どもの熊本大学病院の「地域医療・総合診療実践学寄付講座」の体制には、「玉名教育拠点」、「天草教育拠点」、に加え、今年度から新たに「河浦教育拠点」も加わり、苦労しながらも、地域医療に貢献しながら、人材養成をする事が少しでもできたのでは無いかと感じております。しかしながら、今後のこの様な「教育拠点」モデルの運営、維持・発展に関し、大きな課題も生じていると感じ、今後の実践的な活動の取り組みを危惧する所も大いに有ります。

今年度も、新型コロナウイルスの影響で、熊本大学医学部医学科の授業・実習も多大な影響を受けましたが、地域枠学生に対して行っている、「地域医療ゼミ」も大半がWebでの縮小された実施となり、更に、現地を訪問して行う「地域医療特別実習」も、最終的に今年度も実施出来ませんでした。そして、入試制度が変わり、2022年度からは、地域枠入学者が5名から8名と増える予定となっていたのですが、次年度の地域枠入学者が1名しかいないと言う今までに無い厳しい状況となっております。一方、県の修学資金貸与制度利用の医師がますます地域の医療機関に出ていく事が増えております。専門医修得のための「キャリア形成プログラム」も提供したものの、キャリア形成の為の義務履行の遅延、更には、ライフイベントや体調不良等の個人的事情等への対応など、県の修学資金貸与制度の課題も色々と浮き彫りになってきた様にも感じられました。

県からの委託業務の１つである男女共同参画事業も、「熊本県女性医師キャリア支援センター」として、地域で働く若い女性医師のサポートをしつつ、県全体で女性医師の活動を支援する活動を、地道に着実に続けております。しかしながら、こちらも色々と苦労が有り、今後の女性医師支援等の運営の厳しさが危惧されます。こちらも、より一層のご理解・ご支援を賜りたいと願っております。

次年度以降、「地域医療支援センター」及び「地域医療・総合診療実践学寄付講座」が、新しい体制で、良きコミュニケーション・組織運営のもと、引き続き、熊本県とも更に協力して「地域医療対策協議会」の実施・運営や、「熊本県地域医療ネットワーク構想」の遂行に協力し、熊本県の「第７次保健医療計画」の実現にお役に立てる事を切に祈っております。

最後に、馬場病院長・機構理事長を始め、大学内の様々な先生方、事務方等には多々ご指導・ご支援頂きました。また、当「地域医療支援センター」の事務部門のスタッフの方々および、県庁の医療政策課の方々にも、多大なるご助力を頂きました。本年度も地域医療の貢献の為にご理解頂いた全ての関係者の皆様に、あらためて、一層の感謝を申し上げますとともに、次年度もどうか宜しくお願い申し上げます。

地域医療・総合診療実践学寄附講座／地域医療支援センター
谷口　純一

熊本県地域医療支援機構／熊本大学病院　地域医療支援センター
〒860-8556　熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel：096-373-5627　　Fax：096-373-5796
E-mail：chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP：http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/

熊本大学病院　地域医療・総合診療実践学寄附講座
〒860-8556　熊本県熊本市中央区本荘1-1-1
Tel：096-373-5794　　Fax：096-373-5796
E-mail：chiiki-iryo@kumamoto-u.ac.jp
HP：http://www.chiiki-iryo-kumamoto.org/dcfgm/

令和３年度　活動報告書

熊本県地域医療支援機構 / 熊本大学病院 地域医療支援センター

熊本大学病院 地域医療･総合診療実践学寄附講座